



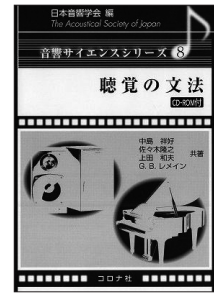
このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

聴覚の文法

中島祥好

わが国では、大学の心理系の学科において聴覚心理学の研究を続けることがなかなか難しい。一つには、日常生活における聴覚の重要性が認識されにくいこと、さらには、いろいろな聴覚刺激を作って聴いてみるのが、理屈は簡単であってもなかなか面倒であることが、原因であると考えられる。本書は、このような状況を改善するために、読者に、知覚心理学の一部としての聴覚心理学に興味を持っていただき、錯覚現象をはじめとする聴覚現象を体験し、自ら聴覚デモンストレーションの作

成を試みるようになるようになっていただくことを目指している（そのためにオーディオCDを貼付した）。聴覚においては、視覚における図と地のかわりに、音事象、音脈というまとまりが重要であることを述べ、時間方向の線的なまとまりである音脈が、言語における文法を連想させる簡単な文法に制約されることを論じた。これは、著者4名に、オランダのGert ten Hoopen博士ほかを加えた研究チームの研究成果である。オムニバス方式を取らず、全編を著者全員で執筆した。



共著 中島祥好・佐々木隆之・上田和夫・ジェラードレメイン
発行 コロナ社
A5判 / 176頁
定価 本体2,500円＋税
発行年月 2014年3月

なかじま よしたか
九州大学芸術工学研究院教授、同研究院応用知覚科学研究センター長。専門は知覚心理学、音声信号処理。著書はほかに『大学生の勉強マニュアル：フクロウ大学へようこそ』（共著、ナカニシヤ出版）、『心理学総合事典』（分担執筆、朝倉書店）、『キーワードコレクション 認知心理学』（分担執筆、新曜社）など。

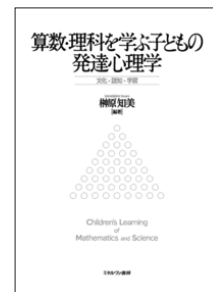
算数・理科を学ぶ 子どもの発達心理学

文化・認知・学習

榊原知美

子どもはどのように算数や理科を学んでいるのでしょうか。算数や理科というと、小学校における教科のイメージが強いですが、実は子どもの学びは誕生直後から始まっています。子どもは日常生活の様々な場面で、数や形を扱ったり、生物や物理世界に親しむ経験を積み、それらを学校での学びに結びつけていきます。当然のことながら、子どもの学びの過程には文化が大きく影響します。例えば、数を表す言葉や、使われる道具、子どもの学びに対する大人の方針や教え方などは文化によ

り様々で、算数・理科に関わる子どもの経験や学び方も異なります。また、これに関わるより現実的な課題として、複数の文化間を移動する子どもの学びの構造を明らかにすることも近年求められています。本書は、このような視点から、乳児から小中学生の子どもの算数・理科の学びの過程について、これまで心理学が蓄積してきた基礎的および最新の知見を紹介するものです。隣接領域の研究者や、教育現場の実践家にも有用な内容が盛り込まれています。是非、お手にとってみてください。



編著 榊原知美
発行 ミネルヴァ書房
A5判 / 232頁
定価 3,500円＋税
発行年月 2014年9月

さかきばら ともみ
東京学芸大学国際教育センター准教授。専門は発達心理学。著書はほかに『発達心理学：周りの世界とかがわりながら人はいかに育つか』（分担執筆、ミネルヴァ書房）、『教育心理学：教育の科学的解明をめざして』（分担執筆、慶應義塾大学出版会）、『Young children's mathematical development in the sociocultural context』（風間書房）など。



共編著 伊波和恵・高石光一・竹内倫和
発行 ミネルヴァ書房
A5判 / 264頁
定価 2,600円+税
発行年月 2014年5月

いなみ かずえ
東京富士大学経営学部教授。臨床心理士。専門は発達心理学。著書はほかに『写真でみせる回想法(付・生活写真集 回想の泉)』(共著、弘文堂)、『人生の終焉：老年学・心理学・看護学・社会福祉学からのアプローチ』(共訳、北大路書房)、『発達心理学：周りの世界とかかわりながら人はいかに育つか』(分担執筆、ミネルヴァ書房)など。

マネジメントの心理学

産業・組織心理学を働く人の視点で学ぶ

伊波和恵

組織のマネジメントと心理学を結びつけることは、とても重要な課題である。だが、ビジネスの現場をまだ知らない学生たちに、産業・組織心理学を、よりリアルに伝えるにはどうしたらよいだろうか。編著者3人は、同僚だった頃から、問題意識を教育活動の中で共有していた。その模索と議論の答えをかたちにしたのがこの1冊である。本書は、各章の冒頭に、全10話の連作ショートストーリーを配している。主人公は架空ながら、編著者たちが大学や企業で出会ってきた人々を投影した、誰でもないが、

どこにでもいそうな普通の青年である。彼の就職活動、中小企業への入社等のライフイベントを通じて、会社組織を知り、働く人と組織との関係性が掴めるように章を立てた。それは経営のトップからみる組織マネジメントの視点とは逆のアプローチとなった。

講義テキストとしては自習や協働学習用コンテンツにも特徴がある。ストーリーが予習や導入用とすれば、章末ケーススタディのほうはレポートやディスカッションに適している。ワークを通じてキャリア教育上の効果も期待しうる。



監修 西條辰義
編著 山岸俊男
発行 勁草書房
A5判 / 216頁
定価 本体3,200円+税
発行年月 2014年10月

やまぎし としお
一橋大学国際経営戦略研究科特任教授。専門は社会心理学、実験社会科学。著書はほかに『信頼の構造：こころと社会の進化ゲーム』(東京大学出版会)、『安心社会から信頼社会へ：日本型システムの行方』(中央公論新社)、『Trust: Evolutionary game of mind and society, English Edition』(Springer)、『文化心理学(上・下)』(共著、培風館)など。

文化を実験する

社会行動の文化・制度的基盤

山岸俊男

私は以前、文化心理学は「生き方の科学」だと書いたことがある。急速に変化を続ける現代を生きる私たちは、これまでとは違う生き方をする必要はあるのか？ そうだとしたら、それはこれまでの生き方とどう違うのか？ この問いは日本人だけでなく世界中の人たちがまさに直面している問いでもある。「生き方」というのは、環境、特に人間が作る社会環境に対してどのように働きかけるかということの意味している。同時に、人々の生き方の違いは社会環境そのものを変化させ、そして新しい環境

がそこに暮らす人々の生き方をアフォードしていく。こうした人々の生き方と社会のあり方との関係を分析する科学を作るには、人々の生き方がどのように社会環境を生み出すかを解明する社会科学と、社会環境がどのように人々の生き方に反映するかを解明する心理学の双方の視点が必要になる。本書の母体である特定領域研究「実験が切り開く新しい社会科学」で社会科学者と心理学者の間で交わされた議論の面白さを、少しでも読者の方々に伝えることができればと考えて本書を編集しました。